『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第36章和訳

引　田　弘　道
大　羽　恵　美[1]

プールナの物語
—『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第３６章—

解　説

プールナ物語のあらすじは以下の通りである。(　) 内は偈の番号。
功徳の賞賛（1）
隊商の主バヴァに3人の息子バヴィラ、バヴァバドラ、バヴァナンディンが生まれる。(2-4)
病気のバヴァは家族に見捨てられる。(5)
看病した召使のマッリカーとの間にプールナが誕生。(6-8)
腹違いの兄たちは航海に出かけるが、プールナは町で商売し大もうけする。(9-11)
父の遺言。女性に惑わされず、兄弟仲良くするように。(12-24)
妻にそそのかされた兄弟たちの仲違いと遺産の分割。(25-27)
プールナは栴檀の商売で大もうけをし、王に供養される。(28-30)
プールナは航海に出、途中船で仏陀の名を聞いただけで喜び、仏陀との会見を切望する。(31-38)
求める人にすべてを与えようとして、彼は航海に六度出かける。
全ての商人たちに船代、税金などの立替払いという恩恵を与える。(31)
プールナの出家。(39-42)
プールナはシュローナーパラーンタカの地に伝道。(43-49)
長兄バヴィラの渡海と災難。(50-57)
バヴィラや商人たちはプールナに帰依。彼による救難。(58-64)

---

[1] サンスクリット原典からの和訳は引田が中心に行い、蔵訳と絵図の解析は大羽が行った。

世尊はプールナが建立した栴檀の楼閣に行幸し、信者に恩恵を与えられる。(65-67)
町はずれの主婦たちは世尊のためにチャイトャを建立。(68-70)
世尊による聖者たちの出家。(71)
世尊は栴檀製の楼閣を水晶製に変えられる。(72-73)
クリシュナとガウタマ聖者が世尊の教えを受ける。(74-75)
世尊は目蓮尊者の母を教導される。(76)
プールナの前世。(77-82)
比丘たちの感激。(83)

この物語は Divyāvadāna（= Divya）第2章にもあり、大筋で一致する。むしろ Divya の内容に基づいてそれを要約したものが、今回翻訳した内容であろうとも考えられる。『カルパラター』の特徴は第12偈から第24偈にかけての父の遺言の中にある女性の本性に対する警戒心である。一見女性蔑視ともとられがちな内容であるが、ここが『カルパラター』の特徴と言えよう。その他 Divya に対応するものとして、
『根本説一切有部毘奈耶薬事』（＝毘奈耶）（大正24、7c-17a）
『蔵訳根本説一切有部律薬事』（八尾史『根本説一切有部律薬事』40-73頁）
また絵画の作例として、アジャンター石窟第二窟右廊[2]やキジルに壁画があることが知られている。
その他『賢愚経』巻6「富那奇縁品」第29（大正4、393c-397a）
Puṇṇovāda-sutta（MN 3, pp. 267-270）

この物語の内容に関して注目すべき点をいくつか取り上げると、
(1) 本文、第31偈から第36偈は注目に値する経に関する内容。プールナは貿易商人たちと一緒に7度目の航海に出かけ、帰路商人たちがスタヴィラガーター（Sthavirāḥ）、シャイラガーター（Śailagāthā）を歌っているのを聞き、仏陀によって歌われた詩であると知って、「仏陀」（Buddha）という言葉に感銘を受け、彼に会いたいと切望したとするものである。
いっぽう、対応する Divya（21: *ll.* 9-10）にも、「夜が白むとき、ウダーナ、パーラーヤナ、サティヤドゥリシュ、スタヴィラガーター、シャイラガーター、ムニガーター、そしてアルタヴァルギーヤ経を詳しく、声を出して唱えた。[3]これを聞いて「ブッダ」と言う言葉に全身の毛穴が総毛立つほど感激し、彼に会いたいと切望した。」とある。『毘奈耶』（11b）には、「彼諸商人、昼夜常誦嗢拕南頌、諸上座頌、世羅尼頌、牟尼之頌、

[2] 定金計次『アジャンター壁画の研究』中央公論美術出版、2009年、図2-39~44。
[3] te rātryāḥ pratyūṣasamaye udānāt pārāyaṇāt satyadṛṣaḥ sthaviragāthāḥ śailagāthāḥ munigāthā arthavargīyāṇi ca sūtrāṇi vistareṇa svareṇa svādhyāyaṃ kurvanti //

衆義経等、以妙音声、清朗而誦。」とある。

これに良く似た文は、『根本説一切有部毘奈耶皮革事』（大正23、1052c）に対応するサンスクリット原典に認めることが出来る。ここでは「するとシュローナ尊者は、世尊によって機会を与えられて、アシュマ・アパラーンタの方言によって、ウダーナ、パーラーヤナ、サティヤドゥリシュ、シャイラガーター、ムニガーター、スタヴィラガーター、スタヴィリーガーターそしてアルタヴァルギーヤ経を詳しく、声を出して唱えた。[4]」とある。村上（1990, 180-183）は、以上の経名を次のように解説している。第1に「サティヤドゥリシュ」（Satyadṛṣṭaḥ / Satyadṛśaḥ）は『十誦律』（大正23、174b）の「薩耆陀舎修妬路」と同じとされ、『雑阿含』（大正2、362c）の「憂陀那・波羅延那・見真諦・諸上座所説偈・比丘尼所説偈・尸路偈・義品・牟尼偈修多羅」中の「見真諦」に相当し、『スッタ・ニパータ』第3章第3の「善言経」（Subhāsita-sutta）を指すとするラモットの説を紹介する。第2に「シャイラガーター」（Śailagāthā）は『スッタ・ニパータ』第3章第7の「セーラ経」（Sela-sutta）を指すであろうとする。ただ「セーラ経」は散文と韻文の両方を含んでいるので、「ガーター」の意味を厳密にとれば、偈だけからなるものが存在した可能性が考えられる。第3に「ムニガーター」は『スッタ・ニパータ』第1章第12の「牟尼経」（Muni-sutta）と同じであろう。第4に「ウダーナ」（Udāna）、「スタヴィラガーター」（Sthaviragāthā / Theragāthā）、「スタヴィリーガーター」（Sthavirīgāthā / Therīgāthā）は、現在パーリだけに伝えられる同名の聖典を想起させるが、「スタヴィラガーター」だけは『スッタ・ニパータ』第4章第16の「舎利弗経」（Sāriputta-sutta）の可能性を紹介する。その他、「パーラーヤナ」（Pārāyaṇa）は『スッタ・ニパータ』第5章 Pārāyana-vagga を指していよう。いっぽう「アルタヴァルギーヤ経」（Arthavargīya）は『スッタ・ニパータ』第4章 Aṭṭhaka-vagga を指していようが、漢訳の「衆義経」、「義品」が意味しているように、パーリの Aṭṭhaka はサンスクリットの Arthaka に対応することになろう。ただこの章の題名の Aṭṭhaka が8（aṭṭha / aṣṭa）に由来し、「八偈より成る」を意味するのか、「義」（attha / artha）から由来するのか2説ある。中村（1984, 377-378）はヴェーダ聖典以来のインドの伝統で、8つずつでまとめることが仏教以前に広く行われていたとして前者の説に立ち、水野（1952）は漢訳『義足経』に基づき後者の説をとる。詳しくは村上（2009, 551-57）を参照。

ところで、この『スッタ・ニパータ』は仏教の多数の諸経典のうちで最も古いものであり、歴史上の人物としてのゴータマ・ブッダのことばに最も近い詩句を集成した一つ

---

[4] athāyuṣmān śroṇo bhagavatā kṛtāvakāśaḥ aśmāparāntikayā svaraguptikayā udānāt pārāyaṇāt satyadṛśaḥ śailagāthā-munigāthā-sthaviragāthā-sthavirīgāthārthavargīyāṇi ca sūtrāṇi vistareṇa svareṇa svādhyāyaṃ karoti /（GM p.188, ***II*** 7-10）その他類似の表現が Koṭikarṇa 物語 Divya（12, ***II*** .23-25）にも認められる。八尾（2013, 53, n.1）を参照。

の聖典であると考えられている[5]。

中谷（2006, 19）は、『スッタ・ニパータ』を分析し、原語・韻律・思想などから3層・5部に分かたれることを論じた。即ち、

層	部	部位	詩節番号	詩節数
I 層	I 部	IV. Aṭṭhaka-vagga	766-975	210
	II 部	I. Uraga-vagga, Khagga-visāna-sutta; V. Pārāyana-vagga	35-75, 1032-1149	159
II 層	III 部	I, II, III vagga	1-765（35-75および序偈を除く）	702
III 層	IV 部	序偈（Vatthu-gāthā）	335-336 ; 679-698 ; 976-1031	78
	V 部	散文部（I, II, III vagga 内）	—	—

さらに中谷（2003, 45）は、I 層はブッダ逝去直後の B.C. 4世紀、II 層はアショーカ王治世頃の B.C. 3世紀で、ニカーヤとほぼ同時期編纂、III 層が B.C. 2世紀と仮定している。

(2) この物語に登場するシュールパーラカの都市の役割。（　）は偈の番号。

この物語では、

仏陀が滞在されているジェータ林がシュラーヴァスティーに位置すること（2）（38）、その都市にアナータピンダダも居住している（37）、という他の箇所にも見受けられる都市と、残忍な人々が住むシュローナーパラーンタカという地方が登場する。この地に出家したプールナは自らの忍耐強さを試すために行くとされる（44）。

いっぽう、この地方より北方に位置する貿易港のシュールパーラカは、今回の物語の登場人物、金持ちの父のバヴァ、その息子のバヴィラ、バヴァバドラ、バヴァナンディン、さらに異母兄弟で主人公のプールナが住む都市である（3-8）。この都市は海洋貿易が盛んであることが、この物語から推察できる。たとえば、年長の三人の兄たちは結婚して財宝を求めて海に出かけ（9）、兄たちは他の国で財産を獲得することが出来た（25）、プールナも航海に六度出かけた（31）、バヴィラは富を求めて海に出掛けた（50）、等の記述が多数見受けられる。

反対に内陸部に位置するシュラーヴァスティーの商人たちは、海洋貿易が出来ず、この地にいる商人に頼み込む必要があった（32）。航海は「牛頭栴檀の森」（51）といった多くの富をもたらす場所もあったようであるが、船は順風ばかりではなく、カーリカ（黒風）といった難破の危険性もあるような暴風も吹いた。しかもその風は自然現象ではなく、夜叉のマヘーシュヴァラによってもたらされたものと考えられていた（53）。

[5] 中村 1984, 433.

この貿易港の都市にプールナは住んでおり、そこに彼は牛頭栴檀によって「栴檀の花環」という名前の楼閣を仏陀のために建立した(65)。仏陀はジェータ林から、百ヨージャナ飛び越えて空中を通ってやって来られた（66）とある。シュラーヴァスティーからこの都市までは直線にして1200キロあるから、両市はかなり離れていることになる。

Sircar（1971, 274, n.1）はシュローナーパラーンタカ（別名、アパラーンタ）はインド西部（Paścād-deśa）に位置し、ムンバイ地域とグジャラートの間の地方を指し[6]、その首都がシュールパーラカ（Sopāra）と説明する。

塚本（1966, 551）によれば、マウルヤ王朝以前のインドにおける通商路は、仏教文献から、①北から南西への路線、②北から南東への路線、③南西の路線があるとされるが、ここで特に重要なのは①の北から南西、つまりŚrāvastī→Pratiṣṭhānaである。このPratiṣṭhānaはSircar（1967, 134）によれば、別名Baithana、現在のオーランガバード地域のPaithan市とされる。塚本（1966, 552-53）によると、マウリヤ王朝の拡大と官僚機構の整備により首都Pāṭaliputra（Patna）と帝国の諸州との交通路線が発達した。南インドの路線では、BroachやKāṭhiawārから南西海岸の港やセイロン（スリランカ）へ至る、西海岸に沿って進む海上の交通路が知られている。例えばスリランカ王Vijayaはシュールパーラカ（Sopāra）からスリランカへ旅行したという記述（Mahāvaṃsa vi. 46-47）を紹介する。またPāṭaliputraからの路線としてAvanti地方から高原をこえてPratiṣṭhānaへ、それからSopāraへ出て西海岸を南下する路線があったことを述べている。このような塚本の記述から、Śrāvastī→Pratiṣṭhānaの路線はかなり古く、さらにマウルヤ王朝にはPratiṣṭhāna→Sopāra、さらに陸路で南下したり、航海に出帆していたことが分かる。当時すでにインドの西海岸からアラビア南東の海岸に沿った海上交通路もあり、シュールパーラカは交通の要所であった。

(3)懺悔の問題。本文第77偈から第82偈によると、プールナは前世でカーシャパ仏のヴィハーラの管理者で、サンガの執事であった。あるとき精舎が掃除されていないのを見ると、彼は怒って掃除担当の比丘に毒づいた。その後彼は粗暴な言葉という罪で地獄に生まれ、その後500回奴隷女の息子として生まれ変わった。またサンガの奉仕という功徳によって阿羅漢の状態となった。

いっぽう、対応するDivya（33: *ll.* 19-21）では、悪態をついた執事のいうことを聞いた阿羅漢が彼に言うには、『汝は激しい言葉を放った。罪を罪として告白しなさい。そうすればこの業は減少し、消滅し、消尽されるであろう。』（kharaṃ te vākkarma niścāritam / atyayam atyayato deśaya / apy evaitatkarma tanutvaṃ parikṣayaṃ paryādānaṃ gacched iti /）と。こうして彼が罪を罪として告白すると、彼は地獄に生まれ変わってか

[6] 塚本（1966, 596）はこのAparantakaの位置づけに関する従来の説を紹介する。

ら奴隷女の息子として生まれるはずであったが、地獄には生まれ変わらなかった。反対に500年間、奴隷女の胎内に生まれた。（tenātyayam atyayato deśitam / yat tena naraka upapādya dāsīputrena bhavitavyam, tan narake nopapannaḥ / pañca tu janmaśatāni dāsyāḥ kukṣau upapannaḥ / ）とある。つまり罪を罪として告白すれば、彼の悪業は軽減され、地獄行きは免れたことになる。ここが『カルパラター』との大きな違いであろう。

上記の「罪を罪として告白しなさい。」（atyayam atyayato deśaya）という表現は懺悔[7]に関連してすでに研究者によって指摘されている。畑2011は以下のような例を出す。なお日本語訳は畑のものをそのまま採用する。

パーリの『阿闍世王経』の中で、王はブッダに懺悔告白する中に、

tassa me bhante bhagavā accayaṃ accayato paṭigaṇhātu āyatiṃ saṃvarāyā ti.（尊師よ、尊師はそのような私の違反を違反として受け入れなさい、将来にわたる節制のために、と。）（DN 1, 85, *ll*. 15-19）[8]

yato ca kho tvaṃ mahārāja accayam accayato disvā yathā dhammaṃ paṭikarosi, tan te mayaṃ paṭigaṇhāma.（そして、大王よ、君は違反を違反として見てから、ダルマにのっとって対処しているのであるから、そのような、君のを私達は受け入れる。）（DN 1, 85, *ll*. 20-26）

さらに懺悔を受け入れる義務の例として別の経典を引用する中で、以下の例文を認めることが出来る。

accayaṃ desayantīnaṃ yo ve na paṭigaṇhati /（違反を示しつつある者を受け入れない者、）（SN 1, 24）

yo ca accayaṃ acccayato na passati, yo ca accayaṃ desentassa yathā dhammaṃ na paṭigaṇhāti.（違反を違反としてみない者と、違反を示しつつある者を法に則って受け入れない者）（SN 1, 239）

参考文献

Divyāvadāna. Ed. by P.L. Vaidya. Buddhist Sanskrit Texts, no. 20, Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1959.（= Divya）

Mūlasarvāstivādavinaya, Carmavastu. Ed. by P.L. Vaidya. Buddhist Sanskrit Texts, no. 16-2, Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning,（= MSV）p.168.

Mūlasarvāstivādavinaya, Carmavastu. Ed. by P.L. Vaidya. Gilgit Manuscripts vol. 3, pt.4, p.188.（=

[7] 畑（2011, 42）は、「懺悔」に対応するインド語は kṣama ではなく、prati-√kṛ の方が多いという最近の研究成果を報告している。

[8] 畑（2012, 25）にも引用されている。

GM）

de Jong, J. W. 1996. “Notes on the Text of the Bodhisattvāvadānakalpalatā. Pallavas 7-9 and 11-41”, 『法華文化研究』第22号 , 82-84.

Edgerton, F. 1953（1998）. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, Delhi: Motilal Banarsidass.

Sircar, D.C. 1967. *Cosmography and Geography in Early Indian Literature*, Calcutta: Indian Studies: Past and Present.

——. 1971. *Studies in the Geography of Ancient and Medieval India*. Second Edition Revised and Enlarged, Delhi: Motilal Banarsidass.

Tatelman, Joel. 2000. *The Glorious Deeds of Pūrṇa. A Translation and Study of the Pūrṇāvadāna,* London and New York: Routledge.

佐藤密雄 . 1963（1993）『原始仏教教団の研究』山喜房仏書林 .

塚本啓祥 . 1966（1980）『初期仏教教団史の研究』山喜房仏書林 .

中谷英明 . 2003「ブッダの魂論」『論集・古典の世界像』文部科学省科学研究費補助金　特定領域研究「古典学の再構築」研究成果報告 V・神戸、32-50.

——. 2006.「スッタ・ニパータにおける dhamma の意味」『日本佛教学会年報』71, 17-42.

中村　元 . 1984.『ブッダのことば―スッタニパータ―』岩波文庫、岩波書店 .

畑　昌利 . 2011「初期仏典における懺悔の諸相」『パーリ学仏教文化学』25, 41-59.

畑　昌利 . 2012「パーリ仏典における阿闍世王」『パーリ学仏教文化学』26, 15-40.

肥田美代子 . 1985.「プールナの出家」（中村　元・増谷文雄監修『仏教説話体系　第25巻　アバダーナ物語（一）』鈴木出版株式会社 .

平岡　聡 . 2007.『ブッダが謎解く三世の物語　上』大蔵出版 .

平川　彰 . 1960（1970）『律蔵の研究』山喜房仏書林 .

——. 2000『平川彰著作集　第10巻　律蔵の研究 II』春秋社 .

水野弘元 . 1952.「ArthapadaSūtra（義足経）について」『印度学仏教学研究』1-1, 87-95.

村上真完・及川真介 . 1990.『仏のことば註―パラマッタ・ジョーティカー―研究　仏と聖典の伝承』春秋社 .

——. 2009.『仏のことば註〈３〉―パラマッタ・ジョーティカー』春秋社 .

八尾　史 . 2013『根本説一切有部律薬事』連合出版 .

和　　訳

功徳の賞賛

神々の池では、泥から生じた蓮[9]が輝いている[10]。（いっぽう）、きれいな水辺の岸に生じ

[9] ここでの蓮は padma、蔵訳は chu skyes。

[10] 原典は vibudhasarasi padmaiḥ śobhite paṅkajinyā とあるが、意味がとりにくい。ここでは de Jong（1996）にしたがって、vibudhasarasi padmaḥ śobhate paṅkajanmā と読んだ。

るような、乾いた土地にある蓮[11]は（愛でるため）触れられることはない。
生まれながらに蓄積されていて、常に内にある清浄な功徳の原因は生まれによるものではない。(1)[12]

隊商の主に３人の息子が生まれる

かつてシュラーヴァスティーで（Śrāvastyāṃ, Tib: mnyan yod）[13]、如意樹のごとき勝者が（jina-kalpadrume）ジェータ林（Jetavanārāma-, Tib: rgyal byed tshal）[14]におられて、一切衆生の安寧のための瞑想に専念しておられた（svasti-dhyānaparāyaṇe）時、(2)[15]
シュールパーラカ（Śūrpāraka-）[16]という町に、大海の如くの財を蓄えた、
隊商の主で（sārthapatir）あり、智者のうちで最も優れたバヴァ（Bhava, Tib: ’byor pa）[17]という名の者がいた。(3)
彼の妻であるケータキーに（Ketakyāṃ, Tib: ke ta ki）[18]三人の息子が生まれた。（彼らは）バヴィラ（Bhavira, Tib: ’byor len）[19]、バヴァバドラ（Bhavabhadra, Tib: ’byor bzang）[20]、バヴァナンディン（Bhavanandin, Tib: ’byor ba dga’）[21]として知られていた。(4)

病気のバヴァ、家族に捨てられる

ある時彼（バヴァ）は病気になり、瀕死の状態に（mumūrṣutām）なった時、
（彼が）粗暴になった為に（pāruṣyād）[22]ひどく嫌悪した妻と息子によって見捨てられた。(5)

---

[11] 「蓮」と訳したが、サンスクリット原文は abjam、蔵訳ではこちらが padma と訳されている。

[12] 韻律は Mālinī。

[13] Divya（15: *l*.1）も同じ。『毘奈耶』（7c）は「室羅伐城」。

[14] Divya（15: *l*.1）は、「ジェータ林・アナータピンダダの園林」（jetavane ’nāthapiṇḍadasyārāme）。『毘奈耶』（7c）は「給孤独園」のみ。塚本1966, 316-17。

[15] 第2偈より第82偈までの韻律は Anuṣṭubh。

[16] 蔵訳は slob ma lta bu（弟子のような）。Divya（15: *l*.2）では Sūrpāraka とある。『毘奈耶』（7c）は「輸波羅迦」。平岡（2007, 95; n.4）は Divya の蔵訳 slo ma lta bu（箕、箕のような）を参考にして、原語は Śūrpāraka とであろうとする。Śūrpāraka（Suppāraka）については Tatelman（2000, 1-2）を参照。

[17] Divya（15: *l*. 2）も Bhava。『毘奈耶』（7c）は「自在」。

[18] Divya、『毘奈耶』ともに特定の名前なし。

[19] Divya（15: *l*. 8）は Bhavila。『毘奈耶』（7c）は「安楽」。

[20] Divya（15: *l*.9）は Bhavatrāṭr。『毘奈耶』（7c）は「守護」。

[21] Divya（15: *l*.10）も Bhavanandin。『毘奈耶』（7c）は「歓喜」。

[22] 病気のせいで粗暴な性格になったため、嫌気がさした家族に見捨てられたこと。Divya（15: *l*.11）は「粗暴な言葉を発するので」（paruṣavacanasamudācārī）とある。『毘奈耶』（7c）にも同じく「自在長者有病。寝臥床席。由其患苦、性多暴急。悪罵親眷」とある。

看病した召使との間にプールナの誕生

一方、彼にはマッリカー（Mallikā, Tib: phreng ldan ma）という名前の一人の女隷民が（dāsī）いた。彼女は信愛をもって（bhaktyā）、身の回りの世話に（paricaryā-）とても専念した。彼女の献身によって（sevayā）、（バヴァは）健康な状態に（svāsthyam）至った[23]。（6）

愛情のある奉仕によって謙虚になり（snehopakāra-pranataḥ）、恩を感じた（kṛtajñaḥ）彼は彼女と共に、

適切な時期[24]に関係を持ったところ、彼女との間に息子をもうけた。[25]（7）

（息子である）彼が誕生した時に父の全ての財産は十分な状態になった[26]。また彼の嬰児は満月のように美しい者で（あったので）、プールナ（Pūrṇa, Tib: gang po）[27]という名前になった。（8）

腹違いの兄たちは航海に出かけるが、プールナは留まる

年長の三人（の兄たち）は結婚して財宝を求めて海に出た[28]。一方、プールナは父の商

---

[23] de Jong（1996）は、サンスクリット語音写と蔵訳 ji srid rnal du gyur pa / /de srid rim gro mchog tu byas から、tāvat sā yāvat svāsthyam āyayau「健康を回復するまでその間よくお世話をした」と訂正している。Divya（15: *ll*. 11-20）では、召使の娘がいて（preṣyadārikā）、彼女が主人を見捨てることなく、医師（vaidya）から薬を処方してもらい、彼の看病を（upasthānaṃ）し、彼は元気を回復したとある。『毘奈耶』（7c）も特定の名前をださず、単に「婢」とだけ記す。

[24] 蔵訳では zla mtshan dus「月経時に」。サンスクリットでは、ṛtau で、「月経時」の意味もあるが、「（妊娠に）適切な時期に」と訳した。妊娠に適する日（リトゥ）については『マヌ法典』に記述があり、月経が始まって５日目から16日目までとし、そのうちの11日目と13日目を除いた10夜をリトゥとする。『マヌ法典』3.46, 47を参照。

[25] Divya（15: *ll*. 20-30）では、「私が何とか生きていられるのも、お前のおかげだ。」（yat kiṃcid ahaṃ jīvitaḥ, sarvaṃ tava prabhāvāt /）と言って、バヴァは望みのものを（varam）与えようとしたが、女隷民は彼と交わろう（samāgama）と望んだ。彼は500カールシャーパナ（kārṣāpaṇa）を与える、あるいは女隷民の状態から解放する（adāsīṃ cotsṛjāmi）といった提案をしたが、彼女は遠くへ逃げても女隷民のままであり、主人と交わることだけを望んだ。こうして妊娠時になると（ṛtumatī）、彼女は彼と交わり、8，9月が過ぎると、男の子が生まれた、とある。

[26] 原典は sarvārthāḥ pūrṇatāṃ yayuḥ。Divya（16: *ll*. 1-2）では、bhavasya gṛhapater bhūyasyā mātrayā sarvārthāḥ sarvakarmāntāḥ paripūrṇāḥ / とあり、平岡（2007, 59）は「長者バヴァのあらゆる望みは叶い、あらゆる事業は前にも増して順調であった。」と訳す。いっぽう、『毘奈耶』（8a）には「所有庫蔵、悉皆充溢」あるいは「所有財物、自然増長」とあり、サンスクリットの artha は「望み」よりも「財物」と訳した。

[27] Divya（16: *l*. 3）も同じ。『毘奈耶』（8a）は「円満」。

[28] これだけでは意味がとりにくい。Divya（16: *ll*. 7-18）には次のようにある。バヴァはバヴィラら３人の息子たちに嫁をもらってやったが、彼らは家業を疎かにし（nirasta-vyāpārāḥ）、妻と戯れ、装飾品にうつつをぬかした（maṇḍana-paramā）。そこでバヴァは頬杖をついて物思いに耽っていた。それを知った息子たちは装飾品を捨て、粗末な耳輪をつけた。彼らは「十万の金を稼ぐまでは宝石の耳輪を身につけない」（na tāvat ratnakarṇikāṃ pinahyāmi yāvat suvarṇalakṣaḥ samupārjita iti）と誓っ

品の庫[29]にて（bhāṇḍa-śālāyāṃ）金儲けを（dhanārjanam）行った[30]。（9）
そして彼らが財宝を得て再び海から帰ると、（手に入れた）金が十万を数えて[31]、町で喜んだ[32]。（10）
航海によって獲得された彼らの財、それ以上がプールナの自分の家での商品によって（獲得された）[33]。（11）

父の遺言

年老いた彼らの父は、臨終の時に（paryanta-vāsare）それを見て
彼らに[34]将来為になることを言った[35]。「渇愛は様々な破滅を生み出す。（12）
（以下のことが）認められる（dṛṣṭaṃ）。お前たちは海での儲けのために（sāmudralābhe）苦労したが、
（反対に）プールナはより大きな苦労もせずに財を獲得した。（13）
善行の報いによって（śubhakarma-vipākena）財を求める人に財産が生じる。（財産は）ある人の手から落ちると、（別の人が）落としたものを得るのである。（14）
正しい道を捨てないこと、適切であることと不適切であることを分別すること、
（さらに）時と場所を正しく知ることによって、良き人たちにはあらゆる点での繁栄がある。（15）

た（pratijñām ārūḍhaḥ）。そのため彼らはダールカルニン（木の耳をもつ者、Dārukarṇin）、スタヴァカルニン（ラックの耳を持つ者、Stavakarṇin）、トラプカルニン（錫の耳を持つ者、Trapukarṇin）という名前が加わった。彼らは商品を携えて大海に旅たった（te paṇyam ādāya mahāsamudraṃ saṃprasthitāḥ）。『毘奈耶』（8b）に、彼らの名前は「木璫」、「銅璫」、「鉛璫」とある。

29　対応する蔵訳は、pa yi tshong khang du「父の店で」。

30　Divya（16: *ll*. 17-18）には、父の言葉として「お前はまだ子供だ。ここに留まって店で商売をしなさい。」（putra bālas tvam / atraiva tiṣṭha, āvāryāṃ vyāpāraṃ kuru /）とある。『毘奈耶』（8b）も同様に「汝今幼少。不堪渉海。可於市肆之中、専旦検校。」とある。

31　Divya（16: *l*. 19）には、「一人ひとりにそれぞれ十万金（の財）になった。」（ekaikasya suvarṇalakṣāḥ saṃvṛttāḥ /）とある。

32　de Jong（1996）にしたがって、svamudire puram // を mumudire pure // と訂正した。対応する蔵訳は、....grong khyer du/ ..... dga' bar gyur/「街で喜んだ」。

33　Divya（16: *l*. 20）には、「プールナはこの場所で正しいやり方で商売をし、十万金以上を得た。」（pūrṇenāpi tatraiva dharmeṇa nyāyena vyavahāritāḥ sātirekāḥ suvarṇalakṣāḥ samudānītāḥ /）とある。サンスクリット原典の読みの訂正に関しては、平岡（2007, 97, n.34）を参照。

34　de Jong（1996）にしたがって、tam ūce を、tān ūce と訂正した。

35　Divya（16: *ll*. 25-26）には、「しばらくしてバヴァ長者は病気になった。彼は考えた。「私の死後は彼らは仲たがいをするであろう。方策を講じなければならない。」（yāvad apareṇa samayena bhavo gṛhapatir glānaḥ saṃvṛttaḥ / sa saṃlakṣayati － mamātyayād ete bhedaṃ gamiṣyanti / upāyasaṃvidhānaṃ kartavyam iti /）。対応する蔵訳では、本文の「将来為になること」（hitam āyatyām）の、āyatyām に相当する語が欠けている。

ダルマを享受するような、賢い人たちは、自分の家で裕福になる。
他の者は（たとえ）宝の鉱床[36]へ行っても生命の危険を（prāṇasaṃśayam）得るのみである。（16）
善き人たちは財産に関する最高の秘密の教えを（dhanasyopaniṣat parā）知るべきである。
悪意のない清浄な心を持つ者にとっては、（財宝神である）吉祥クベーラ（の幸運）が思いのままである[37]。（17）
お前たちは常に結束することにより、分裂から守らなければならない。
壊れた水瓶から水が落ちるように、分裂した家から美徳が落ちる。（18）
薪がばらばらになると、火の同質の持つ輝きがなくなるように[38]、
偉大な家系でも親族がばらばらになれば威勢が（vibhūtayaḥ）なくなる。[39]（19）
兄弟たちに絶え間ない仲違いが一体どうして終わることがあろうか。
（彼らは）夜になると常に妻たちによって憎しみの知恵を（dveṣavidyāṃ）教え込まれている。[40]（20）
斧の刃のような[41]妻が中に入り込まない限り、
気高く、自立した者たちが[42]二つに割れることはない。（21）

---

36 「宝の蔵」と訳したが、サンスクリット原文は ratnākaraṃ、蔵訳では rin chen ’byung gnas su で、「海で」の意味もある。

37 原文は adrohaśuddhabuddhīnāṃ svādhīnānāṃ dhanāc chriyaḥ //（悪意のない清浄な心を持つ、自立した者にとって財産から幸運が生じる。）とも訳されうるが、ここでは de Jong（1996）にしたがって、svādhīnā dhanadaśriyaḥ と読んだ。蔵訳は、nor sbyin dpal ni rang dbang ’gyur/ 「吉祥クベーラは思いのままだ」。

38 de Jong（1996）にしたがって、文頭の athābhinnendhanasya を yathā bhinnendhanasya と訂正し、主文の tathā と呼応させた。蔵訳は、ji rtar...../ de bzhin...../。

39 これに似た表現は Divya（16: *ll.* 30-31）にも認められる。
jvalanti sahitāṅgāraḥ bhrātaraḥ sahitās tathā /
pravibhaktā niśāmyanti yathāṅgārās tathā narāḥ//（1）
（炭が集まると燃え盛るように、兄弟が一緒になると同様になる。
ばらばらになると（炭は）消える。人も炭と同じ。）『毘奈耶』（8c）も同じ。即ち、
衆火相因威光焔　若其分散光便滅
兄弟同居亦如此　若輒分析還当滅

40 第20偈から第23偈まで、女性の悪性が説かれる。Divya（17: *ll.* 1-3）には、「私の死後、お前たちは女性の言うことを聞くべきではない。」（na yuṣmābhir mamātyayāt strīṇāṃ śrotavyam）と忠告し、以下の格言を説く。kuṭumbaṃ bhidyate strībhir vāgbhir bhidyante kātarāḥ / durnyasto bhidyate mantraḥ prītir bhidyati lobhataḥ//（家は女性によって滅び去り、臆病者たちは言葉によって滅び、マントラは間違って運用されると崩壊し、喜びは貪欲から滅びる。）

41 蔵訳には、sta re rno lta bu’ i と「鋭い」が挿入されている。

42 テキストと同様、de Jong（1996）も svavaśānāṃ と読むべきとするが、蔵訳と文脈にしたがって svavaṃśānāṃ と読むべきではなかろうか。蔵訳は、rang rigs smig ma「自らの家族である竹」と

女性たちは、財産をめぐる論争によって兄弟たちを、粗暴な非難によって師匠を、
一方への（偏った）愛情によって友を敵対する状態に導くものである[43]。（22）
友の間の親愛の情の根元を引き抜いてしまう原因になるようなことを、
女性たちは、笑いながら眉をしかめて話す。」（23）
繁栄のために望ましい、以上の為になることを（hitam）息子たちに言うと、バヴァは
無常に駆り立てられて[44]、そのうちに亡くなった（nidhanam āyayau）（24）

兄弟の仲違い

財産が分割されないので[45]、長兄たちは他の国で財産を獲得することが出来た。[46]
一方でプールナは、家にいて財産のことを（vittam）思案した。[47]（25）
しばらくすると、（長兄たちは）家に帰って来て、衣服や食料について言い争い、
妻の忠告に耳を傾けて、彼らに仲違いが（bhedas）生じた。[48]（26）

し、デルゲ版のサンスクリット語音写は、svavaṃśānāṃ となっている。サンスクリット語の韻律では、奇数肢の終わり4音節が svavaśānāṃ であれば、vipulā の UU_ _ の形とみなすことも可能だが、svavaṃśānāṃ とすれば、U_ _ _ と標準的な形になる。その場合、訳は「高く伸びた自らの竹が二つに割れないように、気高い自らの家系が仲違いすることはない。」となろう。

43　テキストは bhrātur arthānuvādena guruṃ pāruṣyakutsayā / mitram ekābhilāṣeṇa nayanti dvaidhatāṃ striyaḥ // であるが、de Jong（1996）にしたがって、bhrātaram arthavādena..... dveṣatāṃ と読んだ。対応する蔵訳は、nor la rtsod pas (D: pa) spun zla dang/ /..... sdang du ’jug/「財産について論争することで、兄弟を .... 敵対させる」。

44　原典は anityatāpariyuktaḥ。de Jong（1996）は anityatāparimuktaḥ (anityatā aparimuktaḥ) と読む。対応する蔵訳は、/mi rtag pa las yongs ma gral/「無常から完全に解放されず」。

45　蔵訳では、nor ni dgos pa min pa’i tshe/「財産が必要でない時」、サンスクリット語では、avibhakte dhane、サンスクリット語音写は、abibhakte dhane となる。蔵訳の dgos は bgos「分配する」の綴りを誤ったか。

46　Divya（17: *l.* 11）に「我々は商品を携えて他国に行こう。」（yan nu vayaṃ paṇyam ādāya deśāntaraṃ gacchāma iti /）とある。

47　Divya（17: *l.* 13）に「プールナは一切の仕事を任されて、そこに居た。」（pūrṇo nyastasarvakāryas tatraivāvasthitaḥ //）とあるから、彼は財産の管理をしたと考えられる。蔵訳では、nor nyid bsgrub la chags gyur「財を成すことに熱中していた」。

48　これだけでは意味が取りにくい。先ず衣服であるが、Divya（17: *l.* 28 - 18: *l.*2 ）に従うと、プールナが絹の店を開いたとき（kāśikavastrāvārī udghāṭitā、『毘奈耶』(9a)　開於迦尸繒婇之庫。）、長兄のバヴィラの息子がやって来たので、彼に上下の絹の衣服を着せた（sa pūrṇena kāśikavastrayugenācchāditaḥ /）。これを見た二人の次兄の妻たちは息子らを遣ると、プールナは絹の店をたたみ安物の服の店を開いていたので（kāśikavastrāvārī ghaṭṭitā, phuṭṭakavastrāvārī udghāṭitā /『毘奈耶』(9b)　其庫已閉、更於余庫、別出麁衣。）、彼らに安物の服を着せた。妻たちはそれを見て、憤慨して夫に告げたとある。

次に食料であるが、Divya（18: *ll.* 2-4 ）に従うと、プールナが砂糖菓子の店を開いたとき（śarkarāvārī udghaṭitā『毘奈耶』(9b)　開石蜜庫。）、長兄のバヴィラの息子がやって来たので、彼に砂糖菓子

憎悪に支配された彼らによって財産が分割されつつある時（vitte vibhajyamāne）、「これは奴隷の子だ。」と言って、プールナは分け前のない状態に（niraṃśatām）なった。[49]（27）

プールナ、薪の商売で大もうけをする

さてしばらくして、彼（プールナ）は財産を満たしていたとき（pūrṇadhanāḥ）[50]、道で、

を与えた。これを見た二人の次兄の妻たちは息子らを遣ると、プールナは糖蜜の店を開いていたときだったので（guḍāvāryām udghāṭitāyāṃ、『毘奈耶』（9b） 遇開沙糖之庫。）、彼らに糖蜜を与えた、とある。

さらに仲違いであるが、Divya（18: *ll.* 4-6 ）に従うと、二人の次兄の妻たちは、夫が分家を決断するように彼らの心を消沈させた。（tābhis taṃ dṛṣṭvā svāminau tathā tathā bhagnau yathā gṛhavibhāgaṃ kartum ārabdhau / 『毘奈耶』（9b） 其婦如是再三讒刺不已。其二三弟便欲分離。）二人の次兄は互いに言った。「このままでは我々は破滅だ。分家しよう。」（sarvathā vinaṣṭā vayam, gṛhaṃ bhājayāmeti /『毘奈耶』(9b） 我等若不即分取物者。所有財物必当散失。宜即分之。）と、ある。

[49] Divya (18: *ll.* 15-19) に従うと、財産の分割の次兄二人の財産三分割案は、一人は家と土地（ekasya gṛhagataṃ kṣetragataṃ ca、『毘奈耶』（9c） 在家之物。及以荘田為一分。）、一人は店と他国との貿易（ekasyāvārīgataṃ deśāntaragataṃ ca、『毘奈耶』（9c） 庫蔵之物、並興易物、分為第二分。）、最後の一人はプールナであった（ekasya pūrṇakaḥ、『毘奈耶』（9c） 円満以為第三分。）。長兄がプールナに財産は分割しないのか（pūrṇasya pratyaṃśaṃ nānuprayacchatha?）と問うと、二人の次兄は「彼は奴隷女の子供だ。誰が彼に分け前をやろうか。それどころか彼こそが我々によって分割される対象だ。ただあなたが気に入れば彼だけを分け前として取りなさい。」（dāsīputraḥ saḥ / kas tasya pratyaṃśaṃ dadyāt ? api tu sa evāsmābhir bhājitaḥ / yadi tavābhipretaṃ tam eva gṛhāṇeti / ahaṃ pitrā abhihitaḥ － sarvasvam api te parityajya pūrṇo grahītavya iti / ）と言った。長兄は「あらゆる財を捨ててもプールナを引き取るべきだと父に言われているので、私がプールナを引き取ろう。」と答えた、とある。『毘奈耶』（9b-c）によれば、三分割のときに、長兄は特別な第三者の分割裁定者の必要性を提案したが（応当集取善断事人）、次兄二人はすでに分割案を決めているので必要ない（我已範籌量。分数已定。何須更喚善断事人。）と却下した、とある。

[50] Divya（18: *ll.* 23-30 ）に従うと、プールナは財産の一部として、長兄のバヴィラに預けられた。長兄は彼以外に何も相続しなかった。バヴィラの妻がプールナと一緒に親戚の家に向かって行ったとき、子供たちが空腹で泣き出したので、朝ご飯を（pūrvabhakṣikām、『毘奈耶』（9c）可与小食）食べさせて欲しいと頼んだとき、プールナは 1 カールシャーパナを（kārṣāpaṇaṃ、『毘奈耶』（9c）銭）要求した。僅かの金もないプールナを妻は責めた。プールナは妻が衣の裾に縫い込んでいた銅線を（ārakūṭākārṣāpaṇān vastrānte badhnanti / tayārakūṭamāṣako dattaḥ、『毘奈耶』（9c）多於衣角。結以悪銭。）彼に渡した。プールナはこの銅銭を握って市場に（vīthīṃ、『毘奈耶』（9c）街巷）出かけると、ある男が海流で流されてきた木材の荷を肩に担ぎ、寒さに苛まれ、震えながらやって来た（anyatamaś ca puruṣaḥ samudravelāpreritānāṃ kāṣṭhānāṃ bhāram ādāya śītenābhidruto vepamāna āgacchati / 『毘奈耶』（9c）遂逢一人負薪将売。其所売薪。乃是海中浮木牛頭栴檀。其売木者、時属厳寒。）、とある。

以上により、プールナは貧乏な状況にあったのであり、本文の「財産を満たしていた」と大きく食い違う。おそらく『カルパラター』の pūrṇadhanaḥ は誤読で、pūrṇo ’dhanaḥ（プールナは財産もなく）の可能性があろう。対応する蔵訳も版により異なる。P: nor gyis gang dus su「財産が満

夏の暑さにもかかわらず、寒さでこわばり、無力な状態になった薪の荷の運び人を（dārubhārakam）見た。(28)
薪の値段で彼（プールナ）は彼（の荷を担ぐ人）から薪の荷を（dārubhārakam）受け取った。
（その中に）火（の上にある物）にも涼を与える天の栴檀を（divyacandanam）見た。(29)
彼はまさに大いなる善行によって（sukṛtena）大いなる財産を得た。
彼は隊商の主らに（sārthavāhānāṃ）仕えられ、王から供養された。[51]（30）

プールナ、貿易船で仏陀の名を聞いただけで喜び、仏陀との会見を切望する

求める人にはすべてを与えようとして、彼は航海に（ratnākaraṃ）六度出かけた。
全ての商人たちに船代（tara）、税金（śulka）などの（立替払いという）恩恵を（anugraham）与えた。(31)
シュラーヴァスティーに（Śrāvastī-）住む貿易商人たちによって（sārthavaṇigbhiḥ）再び頼まれて、
彼は船に（pravahana-）乗って海の島に（samudradvīpam）[52]全速力で行った。(32)
さて、彼は帰途の船上で、商人たちが善逝を拠りどころとする、スターヴィラガーター

ちていた時」D: nor gyis gdung dus su「財産がなく切望していた時」。

[51] これだけでは意味が取りにくい。Divya（18: *l.* 30 – 20: *l.* 19 ）に従うと、プールナは木材の荷の中から牛頭栴檀を（gośīrṣacandanam）見つけ、荷全体を500カールシャーパナの値段で（mūlyena）購入すると、牛頭栴檀を抜き取り、鋸で（karapatrikayā）4片に（catasraḥ khaṇḍikāḥ）分割した。そのときの粉は1000カールシャーパナで売れた（『毘奈耶』（10a）截為四分。鋸木之末。売得千銭。将其五百。以付薪主。）。王が炎症性の熱病で衰弱していると（rājā dāhajvareṇa /『毘奈耶』（10a）爾時輸波勒迦国王。乃患熱病。極重迷悶。）、医者の処方に従い、臣下は市場で牛頭栴檀を求めた。プールナから1000カールシャーパナで買った牛頭栴檀を王に塗ると（rājñaḥ pralepo dattaḥ）、王は元気を回復した（svasthībhūtaḥ）。プールナは３片の栴檀を布で包み１片を手に持つと（gośīrṣacandanasya tisro gaṇḍikā vastrena pidhāyaikaṃ pāṇinā gṛhītvā）、王の許に行き、合計４片の栴檀を30万金（suvarṇalakṣāḥ）で売り、１片を王に献上し、王から「領土内では侮辱されることなく生活したい。」（yadi me devaḥ parituṣṭo devasya vijate ’paribhūto vaseyam iti /『毘奈耶』（10b）王若歓喜与我願者。願住王国。不被欺陵。）という希望を叶えられた。次に500人の商人が（pañcamātrāṇi vaṇikśatāni）海外貿易から多くの商品をもってスールパーラカの都に（sūrpārakaṃ nagaram）来た時、商人組合は、誰も抜けがけ商売をしないという協定を結んだが（vaṇiggrāmeṇa kriyākāraḥ kṛtaḥ）、プールナや長兄を呼ばなかった。プールナは都の外で商いを成立させ、商品に彼自身の印を押すと（svamudrālakṣitaṃ、『毘奈耶』（10b）即自封印。）、これに怒った商人組合は協定違反だとして（『毘奈耶』（10c）我等先共立制。不令独往貨買。要令衆共作價。然後分之。因何汝今輒違衆制。而独買之。）彼を炎天下に（ātape）曝したが（『毘奈耶』（10c）遂曝円満於炎景中。）、王により、協定時に呼ばれなかったプールナは協定違反に犯したことにはならない、という裁定を得た。

[52] Divya（21: *l.* 8 ）は「大海」（mahāsamudraṃ）とのみあり、「島」はない。『毘奈耶』（11b）も「共入大海」。蔵訳は、rgya mtsho’i gling du「海の島に」。

（sthāvirāḥ）とシャイラガーターを（śailagāthāḥ）歌っているのを聞いた[53]。（33）
「これらは誰のものですか。」と彼（のプールナ）によって尋ねられた彼ら（商人たち）すべては、
「これらは賢者の世尊、仏陀によって歌われた偈です。[54]」と応えた。（34）
このように、ただ仏陀という名前を聞いただけで彼は喜びを（harṣam）[55]得た。
【格言】人々の自らの潜在印象に在るものは（svavāsanārūḍhaṃ）語られることにより顕在化するものである。（35）
彼らによって詳細に語られた[56]世尊の話を（bhagavatkathām）聞いて、
彼（プールナ）は彼（世尊）に心を向けて（tadgatamanās）[57]、彼（世尊）に会うことを切望した。（36）
彼（プールナ）はゆっくりと家に帰ると、自分の全ての所有物を（paricchadam）捨て去り、
友人であるアナータピンダダに会うためにシュラーヴァスティーに行った。（37）
（プールナは）出家したいという熱意を（abhilāṣaṃ）彼（アナータピンダダ）に伝えると[58]、感覚器官を制御し、
信愛を込めて、彼と共に世尊の近くに赴いた。（38）

プールナの出家

そこで迷妄という暗闇を照らす一切智者に（Sarvajñaṃ）会うやいなや、
彼（智者）の御足を見るだけで、なすべきことをなし終えたと（kṛtakṛtyatām）考えた。（39）

---

[53] 蔵訳では、tshigs su bcad pa bstan pa'i phyir/ /bde gshegs la brten tshong pa rnams/ / glu ru len pa de yis thos/「偈頌を披露するために、善逝を拠り所とする商人たちが歌を歌っているのを彼は聞いた」とあり、sthāvirāḥ と śailagāthāḥ は蔵訳にはない。デルゲ版のサンスクリット語音写では、sthāvarī とあり、de Jong（1996）によって sthāvirāḥ の可能性が指摘されている。これらの二つのガーターについては解説を参照。

[54] Divya（21: *ll.* 11-12）に「仏語」（etadbuddhavacanam）という表現が認められる。『毘奈耶』（11b）は「是仏所説。」とある。

[55] Divya（21: *l.* 12）に「あらゆる毛穴が総毛だった」（sarvaromakūpāni āhṛṣṭāni）とある。『毘奈耶』（11b）は「身毛皆竪。深生信心。」と信仰心を付加する。

[56] Divya（21: *ll.* 13-16）に、釈迦族出身の沙門ゴータマが出家して無上正等覚を開き、今シュラーヴァスティー郊外のジェータ林・アナータピンダダの園林にいると記す。

[57] Divya（21: *l.* 17）は「彼は彼のことを心にかけて」（sa taṃ hṛdi kṛtvā）という表現をとる。『毘奈耶』（11b）は「繫念在心」。蔵訳は、de la yid song ste/「彼（世尊）に心を向けて」。

[58] Divya（22: *ll.* 1-2）に「何をおいても、長者よ、私は良く説かれた法と律に従っての出家、具足戒、比丘の状態を望みます。」（apūrveṇa gṛhapate icchāmi svākhyāte dharmavinaye pravrajyām upasaṃpadaṃ bhikṣubhāvam iti /）とある。『毘奈耶』（11c）に「長者我今欲於如来善説法律之中、出家受戒、而為苾芻。」。

世尊は彼の意向を（saṃkalpaṃ）知って、彼に言った。
（その際、）歯（から漏れる）光によってあらゆる方向を分別のごとく清浄にした（vivekavimalā）。（40）
「比丘よ、こちらに来なさい[59]。恐れなく（nirāśaṅke）[60]、対立なく、衰退することのない、善く説かれた法と戒に従って、望みのままに梵行を実践せよ[61]。」（41）
このように、恩寵を習慣とする（prasādaśīlena）勝者によって目の前で語られるやいなや、まさに突然、彼の身体に出家の特徴が生じた[62]。（42）

プールナの伝道

そこで、彼は敵に対しても味方に対しても寂静のゆえに（praśamāt）平等に接し（samatāṃ śritaḥ）、
師の教えを受けて[63]、彼（仏）に敬礼して出発した。（43）
シュローナーパラーンタカという（Śroṇāparāntakaṃ, Tib: sro na’i pha rol ’gram）[64]名前の残忍な人々が住んでいる（krūrajanāśrayam）[65]土地に、

59　仏陀在世時の受戒方法。平川（2000, 160-178）; 佐藤（1963, 179-195）を参照。

60　de Jong（1996）は nirākāṅkṣe と読むべきとする。対応する蔵訳は、dogs med「疑いのなく」。

61　原典は brahmacaryāṃ carepsitam とあるが、Tatelman（2000, 199）は brahmacaryāṃ carepsitām と読むべきではないかとする。Divya（22: *l.* 14）にも（ehi bhikṣo cara brahmacaryam iti）とある。『毘奈耶』（11c）に「善来苾芻。汝応修行梵行。」。この「善来比丘」が最初の受戒の姿であったことは、平川（1960, 526-27）を参照。

62　サンスクリット語の papāta ālakṣitā を「特徴が生じた」と訳した。蔵訳では、mtshon pa med par rab byung lhung「特徴がなく出家した」となり、papāta alakṣitā として訳出している。Divya（22: *ll.* 14-16）に、「世尊の言葉が終わると、彼は剃髪となり、大衣をまとい、鉢と水瓶を手に持ち、７日前に髪と髭を剃ったようであり、百年前に具足戒を受けた比丘のような振る舞いで居た。」（sa bhagavato vācāvasāne muṇḍaḥ saṃvṛttaḥ saṃghāṭiprāvṛtaḥ pātrakarakavyagrahastaḥ saptāhāvaropitakeśaśmaśrur varṣaśatopasaṃpannasya bhikṣor īryāpathenāvasthitaḥ /）とある。『毘奈耶』（11c）に「世尊言已。円満即時鬚髪自落。猶如七日先剃髪者。僧伽低衣自然著身。執持瓶鉢。威儀具足。如百歳苾芻無異。」とあり、「自落」、「自然著身」という表現より、alakṣitā〈本人が気づくことなく〉の方が相応しかろう。

63　Divya（22: *l.* 31-23: *l.* 8）には、眼とそれによって識られる対象の色との関係が（cakṣur-vijñeyāni rūpāṇi）先ず例示され、次いで耳と対象の声（śrotravijñeyāḥ śabdāḥ）、鼻と香（ghrāṇavijñeyā gandhāḥ）、舌と味（jihvāvijñeyā rasāḥ）、身と触（kāyavijñeyāni spraṣṭavyāni）、意と法（manovijñeyā dharmā）との関係が説かれる。その関係とは、例えば眼が色を見て、喜びなどを起こすと、喜び（ānandī）→喜びと満足（nandīsaumanasyaṃ）→貪欲（sarāgo）→喜びと貪欲との結合（nandīsarāga-saṃyojanaṃ）→涅槃から遠く離れる（ārān nirvāṇasya）。『毘奈耶』（12a）も、楽欲など→喜愛→貪心→喜貪相応→遠離涅槃、とある。

64　別名 Aparānta, Aparāntaka。Tatelman（2000, 1, 38, n. 3）を参照。

65　Divya（23: *l.* 10-24: *l.* 1）には、この土地の人がいかに残忍であるかを具体的に仏陀があげ、それに対してプールナが喜んで其れを受け止めると応答する形で説かれている。「プールナよ、シュ

他人を通して自らの忍耐強さを試すために[66]彼はやって来た。（44）
そして狩猟には不吉なことに[67]彼が近づいたのを見ると、
狩人は弓をひいて、怒りから殺そうと襲撃した。（45）
動揺しないで、冷静で、恐れを離れた彼（プールナ）が
「さあ、射なさい。」と言うのを見るや否や、彼は平静になった[68]。（46）
彼の狩人が突然大人しくなったところで、恵み深い彼（のプールナ）は
ダルマを説いた。それによって彼は従者とともにさとりを（bodhiṃ）得た[69]。（47）
彼（の狩人）[70]は、そこに善逝にふさわしい、全ての必需品を備えた、
五百の美しい精舎を建てさせた。（48）
いっぽう、プールナもまた、智慧で満たされて、三十三天（の神々）に供養される状態に至った[71]。聖者たちが望むところの離欲の幸運を（vairāgyalakṣmyā）得た。（49）

バヴィラの渡海と災難

さて、しばらくして彼（のプールナ）の長兄バヴィラは財産が尽きた状態になったので、富を求めて海に出掛けた[72]。（50）

ローナーパラーンタカの人々は凶暴で、残忍で、野蛮で、罵り、中傷し、罵倒する。」（caṇḍāḥ pūrṇa śronāparāntakā manuṣyā rabhasāḥ karkaśā ākrośakā roṣakāḥ paribhāṣakāḥ /）とあり、その後、彼らが罵倒したり、手や土塊で殴ったり、棒や刀で傷つけたり、完全に命を絶てばどうするかと、仏陀が質問し、プールナはそれを甘んじて受け止めると答える。『毘奈耶』（12a-b）も同じ。

66　Divya（24: *l.* 2）に「この忍耐という美徳を備えた」（anena kṣāntisaurabhyena samanvāgataḥ）とある。『毘奈耶』（12b）も「柔和忍順」とある。saurabhyena の異読の可能性については、平岡（2007, 105, n.120）を参照。

67　Divya（24: *ll.* 11-12）にも、「何と不吉なことだ、私が禿の沙門に出会うとは。」（amaṅgalo ’yaṃ muṇḍakaḥ śramaṇako mayā dṛṣṭa iti）とある。

68　Divya（24: *l.* 20）には、「浄信を得た」（abhiprasannaḥ）とある。『毘奈耶』（12c）は「即生信心」。

69　ここではプールナがダルマを説くと、直ちに猟師がさとりを開いたとある。いっぽう Divya（24: *ll.* 20-24）では、猟師が浄信を得る→プールナがダルマを説く→帰依させ、学処を授ける（śaraṇagamanaśikṣāpadeśeṣu ca pratiṣṭhāpitaḥ）→プールナは他の500人を男性信者とし、500人を女性信者とする→500の精舎などを作らせる→3ヶ月後三明を身体をもって証明し、阿羅漢となる（tisro vidyāḥ kāyena sākṣātkṛtāḥ / arhan saṃvṛttaḥ /）、とあり、猟師は信者の段階に留まるが、プールナは阿羅漢となっている。『毘奈耶』（12c）も「円満即於彼住。三月夏安居、三月満已。於此身中、断諸煩悩、証阿羅漢果。三明六通、具八解脱。」とあり、円満（プールナ）が阿羅漢となっている。

70　「彼」が、プールナであるか、狩人であるかは不明であるが、前後の文脈から狩人と考えた。

71　Divya（24: *ll.* 25-26）は、yāvat sendropendrāṇāṃ devānāṃ pūjyo mānyo ’bhivādyaś ca saṃvṛttaḥ / という表現。

72　長兄が海を渡ったことは Divya（24: *l.* 25-26: *l.*1）にも同じであるが、二人の弟が長兄と一緒に住もうと提案したが（āgaccha ekadhye prativasāmaḥ）彼に拒否され、彼ら二人によってプールナが作った財産を食いつぶしたと非難されたため（tena dāsīputreṇa mahāsamudram avatīryāvatīrya

そして彼は船に乗って、順風（anukūlaiḥ samīraṇaiḥ）に従って、
牛頭栴檀の森に（Gośīrṣacandanavanaṃ）日をおかずに到着した。（51）
そこで彼が五百本の斧で（樹を）切ろうとした時、
神のようなその栴檀の森は蛇の集団で満たされていた。（52）
その（森の）主は[73]、夜叉の軍勢の（主で）、「マヘーシュヴァラ」（Maheśvara）として知られていたが[74]、
怒りから、「カーリカ」（Kālika）[75]という名前のすさまじい大風を放出した。（53）
その大風によって、（商人たちに）生命の危険がもたらされた。
すべての商人たちは、シヴァ（Śarva）やインドラ（Śakra）を始めとする神々に（助けを求めて）叫んだ[76]。（54）
苦しみの叫び声で騒がしい彼らに、隊商のリーダーのバヴィラは、
長い間考えた後、後悔で一杯になって（tāpa-samākulaḥ）言った。（55）
「弟のプールナは以前に私の為を思って〈次のように〉言った。
『苦は多く楽は少ないのに、あなたはどうして海に行くべきなのですか。』と。（56）
賢く、真実を見る彼の言葉を熟慮せずに（akṛtvā）、
私は財への貪欲心から、このひどい災難の海に落ちてしまった。」と。（57）

プールナへの帰依と彼による救難

全ての商人たちはこれを聞くと、世間で有名なプールナの威力を
心の中で考えた後、他ならぬ彼に帰依した（tam eva śaraṇaṃ yayuḥ）。（58）
「世界の苦しみ・毒・罪を取り去るあなた様に帰依します。
自ら産み出した（udīrṇa-）慈悲の甘露で満たされた心のプールナ様に帰依します。」と。

---

bhogāḥ samudānītā yena tvaṃ bhuñjāno vikatthase/)、長兄は貿易のため海にでかけたとする。

73　de Jong（1996）にしたがって、原典の tatsvāmī のままの読みを採用した。デルゲ版のサンスクリット音写は、tataḥ svāmi。蔵訳は、de nas gnod spyin sde yi rje/「そしてヤクシャ軍の頭領は」とある。

74　Divya（25: *ll.* 2-7）によれば、この牛頭栴檀の森は夜叉マヘーシュヴァラの所有であったが（parigraho ’bhūt /）、彼が夜叉の会合に出かけて留守をしている間（sa ca yakṣāṇāṃ yakṣasamitiṃ gataḥ /）、商人たちが500本の斧を森に運び始めた。こを見た、夜叉のアプリヤ（Apriya）がマヘーシュヴァラの許に行き、事態を報告し、なんとかして欲しいと頼んだ（yat te kṛtyaṃ vā karaṇīyaṃ vā tat kuruṣveti /）、とある。『毘奈耶』（12c-13a）では、この森が夜叉の大自在が守護する所であったが（大自在薬叉之所守護）、不在であったため、商人たちは一斉に木を切り始めた（一時斫截）。これを見た夜叉の作喜が大自在に報告した（仁可知之）とあり、商人たちが斧で木を切り始めたのであり、Divya の斧を運び始めたとは異なる。

75　Divya（25: *l.* 10）には、「大黒風の恐怖」（mahākālikāvātabhayam iti）という名前を出す。『毘奈耶』（13a）には「黒風」とある。

76　Divya（25: *ll.* 22-23）はもっと端的に海に入ることを禁止する（na tvayā kenacit prakāreṇa mahāsamudram avatartavyam iti /）。『毘奈耶』（13a）も同じ（必勿入海）。

（59）
このような彼らの声を合わせた叫びによって虚空が満たされると、
自らの守護神たちは一瞬で（プールナのところへ）行って、その出来事をプールナに言った[77]。（60）
シュローナーパラーンタカに（Śroṇāparāntaka-）いる彼（プールナ）は彼らの災難を聞くと、
三昧に身を守って（samādhi-saṃnaddhaḥ）、虚空を通って一瞬にして船に至った。（61）
そこで結跏趺坐して、彼はメール山の（Merur）ように不動の状態でいた。
彼は世界の帰滅時のように（pralaya-）激しく吹く風の進行を奪った[78]。（62）
プールナが風を防いだと知ると、夜叉の群れの頭領は、
彼に浄心を起こすと（prasādya）、栴檀の森を彼ら（商人たち）に捨ておいて立ち去った。（63）
プールナのおかげで（-prasādād）[79]、バヴィラは栴檀の木々を手にとって、
喜んで彼とともに自分の町のシュールパーラに（Śūrpāraṃ, Tib: slob ma ’dra）帰った。（64）

世尊、栴檀の楼閣に行幸、信者に恩恵を与える

さて、プールナは兄弟の同意のもと、その（シュールパーラ）に、牛頭栴檀によって
「栴檀の花環」（Candanamālā）という名前の、善逝にふさわしい楼閣[80]を作った。（65）

---

[77] 原典は pūrṇaḥ prāha svadevatāḥ であるが意味がとりにくい。de Jong（1996）にしたがって、pūrṇaṃ prāha svadevatā と読んだ。対応する蔵訳は、gang po la smras rang gi lhas/「己の神がプールナに告げた」とあり、Divya（25: *ll.* 26-28）は、「さて、プールナに浄信を抱く具寿の神は彼に近づいた。彼に近づくと具寿プールナに次のように言った。『聖者よ、あなたの兄が困難・苦境・窮地に陥っています。よく心を集中してください。』と。」（atha yā devatā āyuṣmatī pūrṇe ’bhiprasannā, sā yenāyuṣmān pūrṇas tenopasaṃkrāntā / upasaṃkramya āyuṣmantaṃ pūrṇam idam avocat – ārya, bhrātā te kṛcchrasaṃkaṭasaṃbādhaprāptaḥ samanvāhareti /）とある。『毘奈耶』（13a）は「時有天女。先於具寿円満処、起信敬心。」とある。本文の「自らの守護神」とは、プールナに浄信を起こした神を指すのであろう。

[78] Divya（25: *ll.* 28-31）に「彼は心を集中した。具寿プールナは心を集中させると、シュローナーパラーンタカから消えて大海の船の縁に結跏趺坐していた。するとこの黒風はスメール山に跳ね返されたかのように静まった。」（tena samanvāhṛtam / tata āyuṣmān pūrṇas tadrūpaṃ samādhiṃ samāpanno yathā samāhite citte śroṇāparāntake ’ntarhito mahāsamudre vahanasīmāyāṃ paryaṅkaṃ baddhvā avasthitaḥ / tato ’sau kālikāvātaḥ sumerupratyāhata iva pratinivṛttaḥ /）とある。プールナが三昧に入り、一瞬のうちに船に行き、黒風を防いだという内容。

[79] Divya（26: *ll.* 7-8）に「それから彼ら商人たちは、なくなりかけた生命を取り戻すと、具寿プールナに心を浄らかにして、その船に牛頭栴檀の木を満載すると出発した。」（tatas te vaṇijo gatapratyāgataprāṇā āyuṣmati pūrṇe cittam abhiprasādya tadvahanaṃ gośīrṣacandanasya pūrayitvā saṃprasthitaḥ /）とある。

[80] サンスクリット語は prāsādaṃ、蔵訳は khang ba bzang。Divya（26: *ll.* 11-12）に「私はこの牛頭栴

そこでプールナが世尊を思念すると[81]、（世尊は）すぐさま空中を通って、
ジェータ林から、百ヨージャナ飛び越えて（ullaṅghya）やって来られた。（66）
世尊が近づかれると、放たれ出た[82]御身体の光によって
全世界が赤くなり（kapiśitaṃ）、まるで黄金のようであった[83]。（67）

主婦たち、世尊のためにチャイトャを建立

町はずれに住んでいた主婦たちは彼（の世尊）を見て、
激しい心の浄信によって（tīvracittaprasādena）、静かに（世尊を）待ち焦がれる（praśamonmukhatāṃ）[84]ようになった。（68）
世尊は彼女たちに善に満ちた（kuśalopacitāṃ）真実の教えを（satyadeśanām）説かれた。
彼女たちはそれによって、生存を超越して善を（kuśalaṃ）得た[85]。（69）
世尊の神通力により[86]、そこに「町の女性（のチャイトャ）」（Paurāṅganā, Tib: mchod rten grong pa’i bud med）という名のチャイトャを（caityaṃ）[87]
彼女たちは寄進した。今でもチャイトャの礼拝者たちが崇拝している。（70）

世尊、聖者を出家させる

世尊は聖者たちや樹の皮を着た（valkalino）聖者に、

檀によって世尊の為に栴檀が花環のようにある楼閣を造らせよう。」（aham anena gośīrṣacandanena bhagavato ’rthāya candanamālaṃ prāsādaṃ kārayāmīti /）とあり、『毘奈耶』（13b）に「我今以此牛頭栴檀、為仏造作栴檀精舎。」とある。

81　Divya（26: *ll*. 22-28）には、プールナが家の屋上に登り、ジェータ林に向かって両膝を大地につけ、花を散らし、香をくゆらせ、家主に（ārāmikena, āgārikena か？平岡2007, 108（148）を参照）黄金の瓶を持たせて、お願いの言葉を始めたとある。その言葉は『毘奈耶』（13c）に「浄戒妙智慧　能知帰命者　善鑒無依護　願受我微請」とある。

82　サンスクリット語は puraḥprasṛtayā。蔵訳では、bcom ldan byon pa’i sngon du ni/「世尊がやってくる前に」となり、仏が到着するよりも前に御身体の光が届くイメージを持つ。

83　Divya（28: *ll*. 18-19）は「そして世尊によって黄金の光の色の輝きが放たれ、閻浮提が溶けた黄金のように輝くようになるほどであった。」（tato bhagavatā kanakamarīcivarṇaprabhā utsṛṣṭā yayā jambudvīpo vilīnakanakāvabhāsaḥ saṃvṛttaḥ /）とある。『毘奈耶』（14b）も同じく「此是如来放金色光。由此大地皆作金色」。

84　蔵訳では、unmukhatāṃ に対応する訳として、mngon phyogs とする。mngon phyogs は、mngon du gyurba「第六地に達する」と同義でもある。

85　de Jong（1996）にしたがって、cakre bhavād atikrāntās tāḥ prāpuḥ kuśalaṃ yayā と読んだ。

86　これだけでは意味が不明。Divya（29: *ll*. 9-10）は「そして世尊によって神通力をもって髪と爪が授与された。彼女たちは世尊の為に髪と爪の搭を建立した。」（tato bhagavatā ṛddhyā keśanakham utsṛṣṭam / tābhir bhagavataḥ keśanakhastūpaḥ pratiṣṭhāpitaḥ /）と説明する。

87　Divya（29: *l*. 12）は Ghariṇīstūpa もしくは Bakulamedhī という別名を出す。『毘奈耶』（14c-15a）は「宅神搭」もしくは「薄拘羅樹中心柱」。

出家という恩恵を与えて、清浄なダルマの説示を為された[88]。（71）

世尊、栴檀製の楼閣を水晶製に変えられる

それから「栴檀の花環」と呼ばれる楼閣に、勝者、世尊が
入られて、（楼閣を）多くの人々の重さに耐えられるよう水晶づくりにされた。（72）
さて、慈悲の宝庫である彼はそこの宝座に坐された。
一切衆生の寂静のために（śāntyai）涅槃の説示を（nirvāṇa-deśanām）なされた。（73）

クリシュナとガウタマ聖者、世尊の教えを受ける

この間、クリシュナ（Kṛṣṇa, Tib: nag po）とガウタマ（Gautama, Tib: gau ta ma）という二人の聖者の主が（munīndrau）[89]従者を引き連れて、
師のダルマを聞こうと近づいて来て、（師の）教えを受けた。（74）
そこで、世尊は楼閣を受納して（parigraham）、
比丘たちと共に飛び上がり、再びジェータ林に行かれた。（75）

世尊、目蓮尊者の母を教導

（途中）マリーチ世界にいる（marīcilokasthaṃ, Tib: ’jigs rten ’od zer can gnas ba）マウドガリヤーヤナ（＝目連）の母の許に行かれ、
真実の言葉によって（sadgirā）、（世尊は）聖なる真理である（āryasatye）ダルマの道に（dharmamārge）彼女を導かれた[90]。（76）

---

[88] Divya（29: *l.* 14- 30: *l.*15）には、500人の聖者の出家を許し（tatas te bhagavatā ehibhikṣukayā ābhāṣitāḥ —eta bhikṣavaś carata brahmacaryam iti /）、さらにムサラカ山に（Musalake parvate）住むヴァッカリン（Vakkalī nāma）という名の聖者に法を説かれ、出家を許された、とある。パーリ語の vakkalin はサンスクリット語の valkalin に対応するから、Divya の方がパーリ語に近い語形を維持していたことになる。

[89] Divya（31: *l.* 1）では、クリシュナとガウタマという名前は同じだが、彼らは聖者ではなく海に住む二匹の竜王（kṛṣṇagautamakau nāgarājau mahāsamudre prativasataḥ /）とある。『毘奈耶』（15c）も、「爾時於大海中、有二龍王。一名黒者龍王。二名憍曇摩龍王。」

[90] Divya（31: *l.* 20- 32: *l.*25）には目連尊者が思いを凝らしたところ、彼の母バドラカニャー（Bhadrakanyā）がマリーチ世界に生まれ変わっているのを知った（samanvāhartuṃ saṃvṛttaḥ paśyati marīcike lokadhātau upapannā /）。母を教導するのは世尊しかいないと思い、尊者は世尊と共に、尊者の神通力をもって（ṛddhyā）、スメール山の頂に両足を掛けて７日間で母の許に行った（tato bhagavān āyuṣmāmś ca mahāmaudgalyāyanaḥ sumerumūrdhni pādān sthāpayantau saṃprasthitau / saptame divase marīcikaṃ lokadhātum anuprāptaḥ /）。四聖諦を洞察させる法の説示を（caturāryasatya-saṃprativedhikī dharmadeśanā）世尊がされると、母は在家信者として（upāsikāṃ ca māṃ dhāraya）、世尊と目連尊者に食事をふるまった、とある。『毘奈耶』（16a-c）も同じ。

プールナの前世

さて、ジェータ林に到着された世尊に、驚きをもって
比丘たちはプールナの功徳を（puṇyaṃ）尋ねたところ、世尊は答えられた。(77)
プールナは過去、前生で正等覚であるカーシャパの（Kāśyapasya）[91]、
ヴィハーラの管理者（vihāra-adhikṛtaḥ）で、サンガの執事（saṃgha-upasthāyako）[92]であった。(78)
ある時、彼は精舎の土地が掃除されていないのを見て、
出家者である知洒掃事（upadhivārikam）[93]にひどく怒って言った。(79)
「今、このヴィハーラが掃除されていない。
どんな奴隷女の高慢な息子が知洒掃事の役をしているのか。」と言って彼を罵った[94]。

---

[91] 『毘奈耶』（16c）は「迦葉波仏」。Divya（33: *l.* 11）には、この仏はヴァーラーナシーにおられた（buddho bhagavān vārāṇasīṃ nagarīm upaniśritya viharati /）とある。

[92] Tib: nye gnas. Edgerton（1953, 143）の upasthāpaka の項目には、これは upasthāyaka と読むべきとし、Mahāvastu 2.159.12 の出典をあげ、「servant」との意味と理解する。いっぽう、対応する Divya（33: *l.* 12）に tripiṭakasaṃghasya ca dharmavaiyāvṛtyaṃ karoti/ とあり、平岡（2007, 93）は tripiṭakaḥ saṃvṛttaḥ saṃghasya と訂正して「三蔵を習得して、如法に僧伽の執事をしていた」と訳す。これによれば、upasthāyaka は vaiyāvṛtya（Pali: veyyāvacca）と同じ意味と考えられよう。veyyāvacca-kara は「執事、召使」の意味。『毘奈耶』（16c）は「具解三蔵、為諸苾芻番次撿挍事業。」とある。平川（1960, 735-36）によれば、「賢者よ、彼が比丘の執事人なり」と呼びかけられているこの執事人（veyyāvacakara, vaiyāvṛtyakara, vaiyāpatyakara）は比丘の所持できない金銭を、比丘に代わって保管している人とされる。寄付者の使者は執事人などに衣料を渡して去り、比丘は衣を必要とする時、執事人のところへ行って、その衣料で衣を作ってもらう。その衣は「浄衣」（kappiya, kalpika）とされる。Edgerton（1953, 511）の vaiyāpatya の項目には、「目上の人、特にブッダまたは比丘への奉仕」とある。『翻訳名義大集』8736 は vaiyāvṛtyakara を「執事」と漢訳し、「他の為に事を視る人」と説明する。

[93] upadhivārika を『毘奈耶』（16c）に従い「知洒掃事」と訳した。蔵訳では該当箇所が、re mos ’bab pa’i rab byung la「交代で来ていた僧に」となる。Divya（33: *l.* 13）は upadhivāra。平岡（2007, 93）は、「物品管理 [比丘]」と訳す。佐藤（1963, 310-17）はパーリ律に従って、白二羯磨で選ばれるサンガの役員 17 種の執事人を列挙する。彼らは比丘の日常生活に関して衣食住の管理等をなすものである。さらにパーリ律にはないものの、『翻訳名義大集』9067 に挙げる執事（upadhivārika）を指摘する。この執事は「掌堂師」と漢訳されている。これだと僧院などの管理者となり、掃除担当の比丘とは考えがたい。Edgerton（1953, 136）の upadhivāraka の項目にも、「僧院の指導的地位の者で、特に物品管理の責任者」と理解し、さらに「サンガの規律違反を取り締まる者」という説をも紹介する。以上の説を考慮すると、掃除がされていないのを見て怒った upasthāyaka と実際に掃除の役を果たした upadhivārika では、後者の方が立場が高いように思われる。これでは『カルパラター』本文の内容にそぐわないように思える。平川（1960, 743）は、寺院の雑用をする人として「園民」（ārāmika）の存在を指摘する。彼は在家人であって、しかも精舎にいて、比丘や沙弥等のために、種々の雑用をする人である。『カルパラター』の時代には、upadhivārika は ārāmika 程度の地位でしかとらえられていなかったとも想像できる。

[94] de Jong（1996）にしたがって、dṛptasyopadhivāro ’dya vihāre ’sminn amārjite と訂正して訳した。

（80）
その粗暴な言葉という（pāruṣya-）悪行によって[95]地獄の悪趣を甘受して、
プールナは500回の誕生に奴隷女の息子となった。（81）
彼のサンガの奉仕だけはより大きな功徳となった[96]。
それによってあらゆる（来世の）存在や煩悩がなくなった（niḥśeṣabhavakleśojjhitaṃ）
阿羅漢の状態になった。（82）

比丘たちの感激

以上の、プールナの功徳の蓄積によってもたらされた威徳が勝者によって語られた。
この奇跡を聞いて集会にいた比丘のサンガは功徳を讃えることに専念した。[97]（83）

作例解析

1.『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』の絵画セットについて

先に発表した第31章（蔵訳32章）と第34章（蔵訳35章）の和訳と絵画作例の解析の中に、チベットにおける『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』の複数の絵画セットについて明らかにした[98]。本稿でもナルタンの木版画を原画とするセット（以下、「ナルタンのタンカ」）と、シトゥ・パンチェンのタンカセット（以下、「シトゥのタンカ」）と、41幅からなるタンカセット（以下、「41幅のタンカ」）の三種のタンカセット（複数の軸装の絵画で一具とする）を参照して解析する。

以前にも指摘ように、「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」は様式的に酷似しているだけでなく、各情景の表し方が同じである。すなわち、どちらかがそれぞれの情景を分割して断片にして複製し、その断片を配置したと考えられる。そのため、一幅のタンカをそのまま複製したのではなく、「ナルタンのタンカ」か「41幅のタンカ」のいずれかを断片に分割して模写し、それらを組み合わせることでもう一方のタンカが作成された可能性が指摘できる。本稿の解析の対象である「プールナの物語」に関してもそれ

蔵訳では、前註に引き続いて、su yis res la bab pa zhes/「誰が（掃除をする）順番であったか、と言って」となる。

95 Divya（33: *ll.* 19-20）には「汝は激しい言葉を吐いた」（kharaṃ te vākkarma niścāritam /）とある。

96 原典は mahīyasā だが、de Jong（1996）にしたがって mahīyase と読んだ。

97 韻律は Upajāti。

98 引田弘道、大羽恵美 「『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第31章、34章和訳」『人間文化 : 愛知学院大学人間文化研究所紀要』 第30号 , 2015, 240-213.

ぞれの断片はほぼ同一であるため、このような方法が取られたと考えてよいだろう。また、この物語に関しては、「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」において表すエピソードの情景の数はほとんど同じであった。つまり、「41幅のタンカ」は表すエピソードの数が多いため、「ナルタンのタンカ」にはないシーンが挿入されることがあるが、今回は「41幅のタンカ」のみに見られるエピソードは少なかった。

「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」および「シトゥのタンカ」の絵画として成立した時期は1700年代であり、「41幅のタンカ」と「シトゥのタンカ」はほぼ同時期の十年と隔たらない間に完成している。それにもかかわらず、「シトゥのタンカ」については、「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」との様式的、あるいはエピソードの表し方の点で類似性はなく、独立して作成されたと考えられる。施主や制作を指揮した者が異なり、制作を指揮した者が属する宗派が同じではなく、制作地も離れていることが理由として考えられる。

図1　「41幅のタンカ」No.15

図2　雍和宮万福閣に展示中のタンカ「41幅のタンカ」No.15に相当

2. プールナの物語の絵図解析

2.1 「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」における同定

41幅のタンカではSciaky版（現在ダラムサラに所蔵）に付される通し番号が15のタンカの中尊の上部に「ゴーシラの物語」が描かれる（図1）。同じ41幅からなる雍和宮の万福閣に展示中のタンカは（図2）、Sciaky版と一部の違いはあるものの、

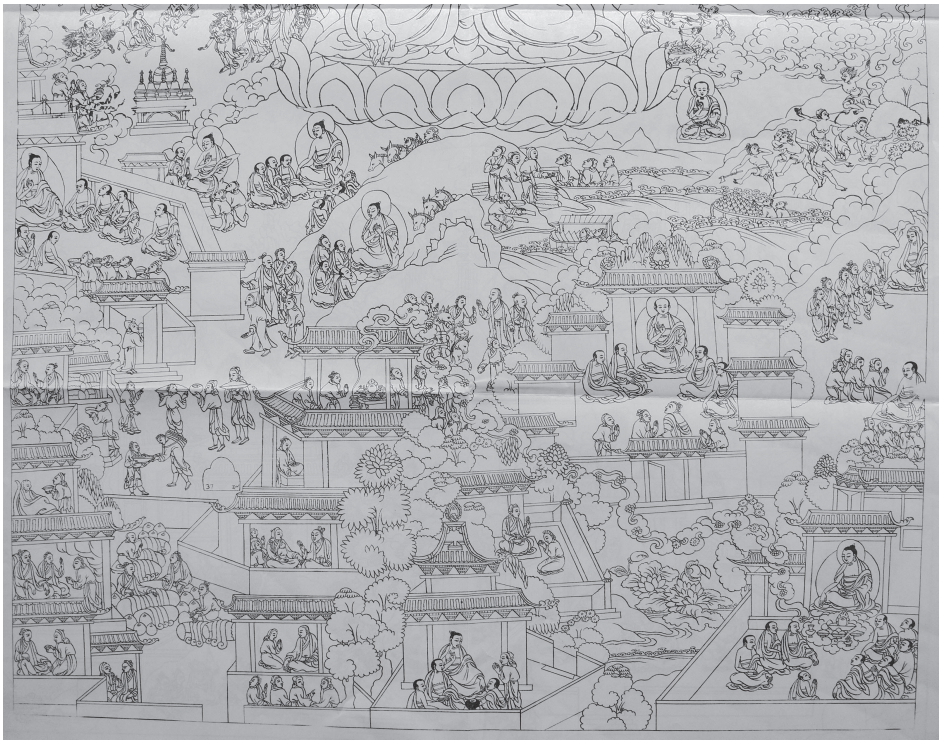

図3「ナルタンのタンカ」に基づく線描図（右12）　下部拡大図「プールナの物語」

全体で見ればほぼ同一の構造で描かれている[99]。

「ナルタンのタンカ」の系統では、右の12枚目に展示されるタンカの中尊の釈迦の下の左側に「ゴーシラの物語」が描かれている。図3の左端に縦に連なって建物を描いており、その中に人物を描きこんでいる。最上階の部屋の中に男性が二人向き合って座っている。この箇所に銘文はないが、おそらく主人公であるプールナの長兄たちを表すのであろう。その下に、男性が床について女性が介護する場面を描く。これは、父であるバヴァが病気で床につき、召使が世話をするシーンであろう。その下に三人の男性が会話をする場面とそのさらに下には男性が女性と話す場面、その右横にその男性と女性が親密になる場面を描く。これらはプールナの三人の長兄たちと、病気を看病した召使と父バヴァが関係を持つことを表し、プールナが誕生する前の逸話を描いた箇所である。

[99] 最も大きな違いは主尊の釈迦坐像の上に描かれる像で、Sciaky 版は無量寿（tshe dpag med）の坐像を描きこむのに対して、雍和宮のタンカはゲルク派の祖師の坐像を表す。それぞれのタンカセットに描きこまれる、説話の登場人物ではない人物像の異同については別稿で発表予定である。主尊タンカと最後のタンカに描かれる人物像については以下を参照されたい。Oba, Emi. “Identification and Analysis of the First and the Last Paintings of dPag bsam ’khri shing: Part 1” *Journal of the International Center for Cultural Resource Studies*. 掲載予定。

その右の建物の中にさらに召使と父が対面する場面を描き、その上は召使が小さな赤ん坊を抱いて父に向かい合っているため、プールナが誕生した場面を表している。しかし、父が亡くなると、長兄たちによって遺産分割が行われることになる。誕生のシーンの左に多くの荷物と四人の男性が描かれており、三人の長兄たちが遺産を分割し、召使の子であるプールナには分け与えなかったことが示される。その上に、荷物を背負った男が薪を持つプールナと取引をする場面が描かれる。プールナはその取引で得た栴檀で利益を上げ、航海に出る。航海のシーンは中尊の釈迦の蓮弁のすぐ下の右側に描かれる（図3右上）。図では右端中央よりやや上あたりに洞窟の中に坐す出家した姿のプールナを表し、彼の前に弓を持った人物がいる。これはプールナが野蛮な地を教化した場面である。そして、長兄のバヴィラは牛頭栴檀の森で木を切ろうとして夜叉の怒りにふれ、嵐に見舞われる。その場面が図3の右端でプールナの教化のシーンの上に描かれる。図では髪を振り乱した夜叉が雲と炎を起こし、慌てる商人たちの左にプールナが禅定に入った姿で表され、夜叉と嵐を鎮める。これをきっかけに商人たちはプールナに帰依するようになる。さらに慌てる商人たちの下に船の中に白い塊を満杯に積んだ船が描かれ、夜叉の怒りを解き、牛頭栴檀を無事に持ち帰ることができたことも図示される。次のシーンは左端中央のやや上の世尊が説法を行う場面である。プールナは「栴檀の花環」という名前の楼閣を作ると、世尊がやって来て、楼閣を水晶づくりにした事績を表した箇所である。その場面の上にある仏塔は、町の女性たちが寄進したというチャイトャである。その右の、世尊が六人の比丘たちを前に坐すシーンはクリシュナとガウタマという二人の聖者と従者が教えを受けたことを表す。最後のプールナの前世の話はタンカ右上隅に描かれる。プールナが以前に他の人に悪いことをしたので、召使の子として生まれたことが記される。図３の左下部分の栴檀の取

図４「シトゥのタンカ」

引のシーンに石碑を示すドリン（rdo ring）が表され、「第37章プールナの物語」と書きこまれている[100]。

2.2 「シトゥのタンカ」の絵図解析

「ゴーシラの物語」は「シトゥのタンカ」の第34章から38章までが描かれるタンカ（図4）の中央部左寄りに描かれる（図5：図4の部分図）。「シトゥのタンカ」には「ナルタンのタンカ」の系統で見たような物語を示す銘文が書きこまれていないため、絵図のみに基づく場面同定となる。

タンカ上部の須弥山の左に海が描かれており、二艘の船が浮かんでいる。おそらく、三人の兄たちが金儲けのために航海に出かけたシーンを表しているのであろう。次に、図5左下に男性二人が向き合って立つ姿が描かれる。彼らは束になった牛頭栴檀を取引しているようである。プールナが牛頭栴檀を破格の値段で得るシーンであろう。次のシーンを表す箇所は須弥山の左の海の中で、他と比べて大きく描かれている船があり、その中にプールナと商人たちが乗っているとみられる。これはプールナが商人たちによって歌われるガーターを聞き、仏陀に会うことを切望するシーンであろう。その下の入り江に船が着くシーンでは二人の男性が迎えている。プールナが帰宅したシーンであろうか。その後、プールナはシュローナーパラーンタカに伝道に向かう。図では須弥山の左の大きな船の下に山が描かれ、出家者が弓で襲われるシーンと、その左に瞑想する出家者が描かれる部分がある。これはプールナが野蛮な土地で狩人に襲われそうになりながらも平静を保ち、彼らを悟りに導いたという情景を描くのであろう。その上の岸には一艘の船が接岸しており、その島に樹木が茂り、雲が起こり、商人たちが樹を切る姿が表される。このシーンは、

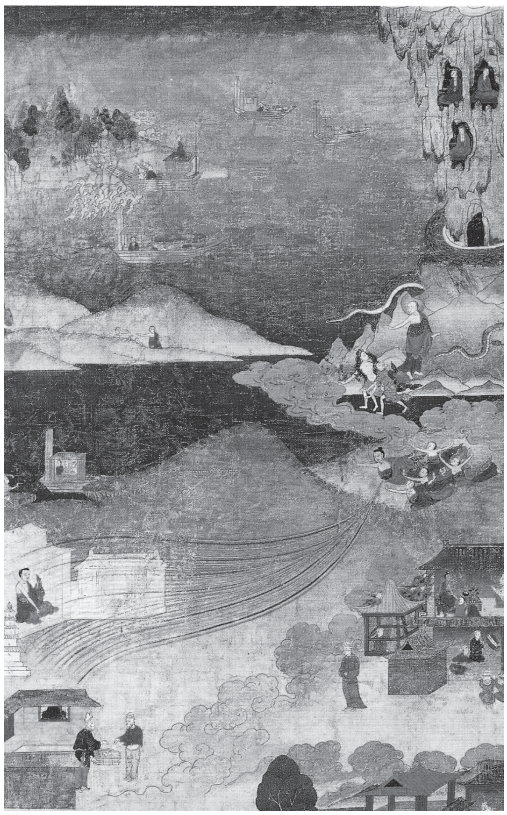

図5「シトゥのタンカ」
図4 左部拡大図

[100] “Yal ’dab sum cu rtsa bdun pa gang po’ i rtogs brjod”

長兄のバヴィラが栴檀の森で木を切ろうとして、夜叉が風を起こしたシーンである。接岸する船の上に出家者が座る姿が描かれるが、これが出家したプールナで、バヴィラと商人たちが、プールナに帰依したところであろう。次に、画面中央から左に向かって釈尊と弟子たちが空を飛行する姿が描かれ、左の先には楼閣と仏塔が描かれる。その中に一人の男性が座っている場面を描くが、この人物は世尊であろうか。楼閣はプールナが寄進した栴檀で作られた楼閣で、仏塔が村の女性たちが寄進した「町の女性のチャイトャ」であろう。「シトゥのタンカ」では、物語の最初に語られるプールナ誕生前のいきさつや、物語後半部のクリシュナとガウタマ聖者の話、目連の母の教導、プールナの前世のヴィハーラの管理者であった話は描かれていない。

3．まとめ

「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」および「シトゥのタンカ」の作例における場面同定を行った。いずれも文献に忠実に表されており、銘文を合わせれば話の主要なシーンを追うことが可能となっている。「ナルタンのタンカ」や「41幅のタンカ」と「シトゥのタンカ」においては様式が異なるだけでなく、抽出する場面が異なることがあるため、「シトゥのタンカ」は他のタンカを模倣せずに、文献に基づいて制作されたと考えてよいだろう。

参考文献

Forty-one Thangkas from the Collection of His Holiness the Dalai Lama: Past Lives of the Buddha. 1980. Paris: Editions Sciaky.

Padma-Chos-’Phel, Deborah L. Black, and Kṣemendra. 1997. *Leaves of the Heaven Tree: The Great Compassion of Buddha*. Berkley: Dharma Pub.

Rani, Sharada. 2005. *Buddhist tales of Kashmir in Tibetan Woodcuts: Narthang Series of the Woodcuts of Kṣemendra's Avadāna-kalpalatā*. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

Rhie, Malylin M. and Thurman, Robert A.F. 1999. *Worlds of Transformation: Tibetan Art of Wisdom and Compassion*. Harry N. Abrams [distributor].

rTogs brjod dpag bsam ’khri shing gi snyan tshig gi rgyan lhug par bkrol pa mthongba don ldan. 1981. Delhi: Karmapae Chodhey.

Tucci, Giuseppe. 1999. *Tibetan Painted Scrolls*. Bangkok: SDI Publications.

Wan, Jiapeng, ed. 2003. *The Complete Collection of Treasures of the Palace Museum: Tangka-Buddhist Painting of Tibet*. Hong Kong: Commercial Press.

図版出典

図１　Sciaky 版（*Forty-one Thangkas* 1980）通し番号15

図２　筆者（大羽）の現地調査で撮影した画像を資料として画像処理して作成

図３　（Rani 2005）通し番号13下部

図４　（Rhie and Thurman 1999）　148頁
図５　図４の部分図

本研究はJSPS科研費基盤研究（C）「『アヴァダーナ・カルパラター』を中心とした仏教信仰の諸相」（平成26-28年度、課題番号：26370058、代表：引田弘道）の成果の一部です。